



すべての子どもが参加できる共生体育ー特にアダプテーション・ゲームを用いてー

研究の概要

アダプテーション・ゲーム (Henninger & Richardson, 2016) は、主に球技やボール運動を対象とし、ゲームでの負けたチームが勝ったチームに対して次のゲームのルール調整 (アダプテーション) を要求し、拮抗したゲームとなることを目指すものです。また、このアダプテーションは両チームにとって互恵的な学びを生み出します。子ども達自身がルール調整を行うことにより、拮抗したゲームを作ることによる参加意欲の向上、相手との技能差を考慮したルール調整を提案することによる思考力・判断力・表現力の成長、さらに技能の向上までも期待できます。アダプテーション・ゲームの実践は、個人が合理的配慮を求めることを通じて互いに理解し、受容しあう能力の向上を図り、その道徳的な教育効果を期待できます。

このような相互理解・相互受容を進めることは共生体育を進める重要な資質となるでしょう。そこでこの研究は、体育授業の中でアダプテーション・ゲームを中心とした相互理解・相互受容の機会の創出から、その道徳的教育価値を明らかにします。

研究の特徴

インクルーシブ体育の必要性はサラムンカ宣言 (UNESCO, 1994) を起点として、現行学習指導要領、特に学習指導要領解説体育編、保健体育編において共生の視点として強調されています。これは、1989年の学習指導要領において男女共習が求められたにも関わらず、実態として進んでいないこと、習熟度別学習が実施されていることへの警鐘でもあります。共生の視点は性別、体力の有無、障がいの有無、年齢等、様々な差を包括することを求めたものであり、教師の指導方法の改善と子どもの資質向上を目指したものです。つまり、誰もが参加できる授業づくりが教師側には求められ、様々な差を受容し共にスポーツの場を作ろうとする生涯スポーツ実践としての資質を育むことが子どもには求められています。

行政・経済界・地域と連携した取り組み例

和歌山県教育委員会の授業力向上事業では、学習指導要領実施のため共生体育を進めており、小学校、中学校、高等学校の授業研究会において指導助言を行っています。また、県外でも学校における指導助言を行っています。

研究者からのメッセージ

共生の視点は次期指導要領ではさらに中心的な課題となります。

差の包括に取り組むには、教員の意識と子どもの意識を変えていきましょう。

詳細は以下の Web ページを参照してください。

<https://researchmap.jp/read0144017>



研究分野 : 共生体育, アダプテーション・ゲーム, 共同体感覚

研究者の所属部局・職位・氏名 : 和歌山大学教育学部 保健体育・教授・村瀬浩二

本件に関するお問い合わせ : liaison@ml.wakayama-u.ac.jp



wakayama univ.